

聖句
如来の外にわれあるにあらず
一切は如来より来り
如来に帰る

土屋観道

真生

第 77 卷 470 号

<http://canchiin.net>

平成30年4月15日
1・4・7・10月15日発行

【発行所】
真生同盟本部
〒105-0011
東京都港区芝公園
2-2-13 観智院

【振替】
00160-6-80674

【電話】
03(3431)1450

【Email】
shinsei@canchiin.net

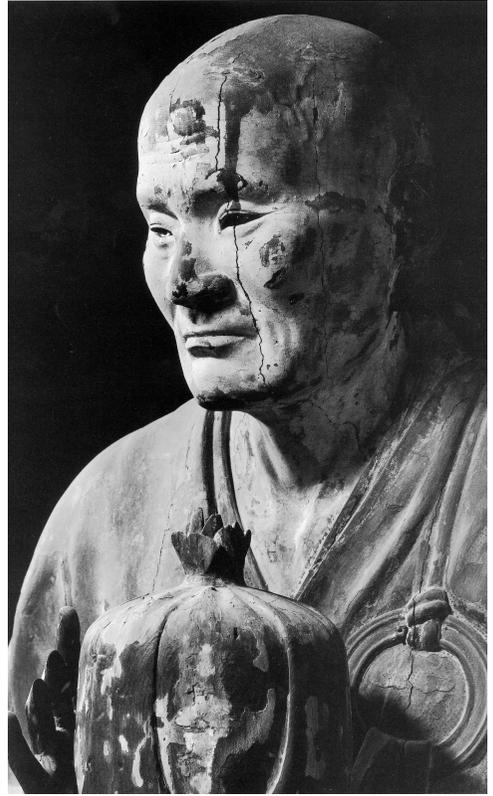
【編集兼発行人】
土屋正道

| | |
|----|-----------|
| 会費 | 年額 2,000円 |
| | 一部 100円 |

信仰の階梯

私の念仏の歩み(1)

正道



興福寺 無著菩薩立像

「私の見聞きしていた念仏の教えとは違う！」と思って、一刻も早く逃げ帰りたいと思いました。

論理的に物事を考えるようになっていた私には、阿弥陀仏や極楽浄土はおとぎ話のように感じられました。特に法蔵菩薩の「本願」が成就して阿弥陀仏となられたから「往生」は間違いない、と言われても狐につままれたようで少しも納得がいきませんでした。それでも3週間のうちに修行仲間に恵まれたおかげでしょうか、不思議なことには最後は帰りたくないと思ふようになりました。

大学3年の夏、転機が訪れます。諏訪唐沢山修養会の座談会で一人ずつ思っていることを発表したときのことです。

「世界の宗教は同じ頂きを目指している。キリスト教に生まれればアーメンだし、日蓮宗に生まれれば南無妙法蓮華経だ。たまたま私は南無阿弥陀仏と称えているだけだ」というと、大勢の檀信徒や

「私の国極楽浄土に生まれたいと願い、私の名を称えるものはいかなるものも必ず救う」というみ仏の本なる願いを信じ、ただ南無阿弥陀仏と称える。一番簡単な行のはずですが、若い頃はなかなか素直に称えられませんでした。小さい頃は、祖父観道や父光道の姿を見て、お集まりくださる檀信徒の皆様が心より喜んでいらっ

しゃるご様子を見るにつけ、私も「真生」を皆様にお伝えする人になりたいと思ひ、意味もわからなのまま「真生礼拝儀」を唱和し素直に念仏を称えていました。ところが中学校高校ぐらいいになると頭で理解できないと信じられなくなってきました。大学に入り、浄土宗の教師養成道場に入行して伝統的な浄土宗の教えを聞いた途端、

大学の先輩後輩がいる前で光道上人に厳しく叱責されました。

「お前は山道を前に、あの登り口は楽しそうだとか、あの登り口は楽しそうだと言っているにすぎない。雲に隠れた頂きがどうして一つだとわかるのか？登ってみなければわからない。今のままではお前は一生信仰に入らずに終わるだろう。なぜ自分の目の前にある念仏の道を進んで行くこうとしないのか？」

土屋光道上人供養席挨拶

二〇一七年八月十九日(土)

土屋 正道

光道上人はたいへん花が好きなので薔薇や椿を育てておりました。お持ち帰りいただくクッキーの掛け紙に、昨年撮りました月下美人、一夜だけ咲く花を使いました。下に「華開見佛」という印を押ししました。これは母と一緒に中国に参

「お前は偶然ここに生を受けたと

思っているのか？」
私は師父からの鋭い叱声にショックを受け、自分を見透かされた恥ずかしさで泣きました。信仰に入りたいのに、目覚めた自我が邪魔をしていました。それから少しずつですが、念仏を申すようになりました。

ところが念仏しようとするところ「念仏すら称えられない自分」に気づき始めたのです。

続く

日は師父光道の表葬儀並びに供養席にご参列を賜り誠にありがとうございます。

観が変わる、そして大学に入りましても休講が多かったと聞いてお

ごいしました。本席は大学や宗門で親しくさせていただいた皆様方、そして教官としてお世話になりました増上寺役職の皆様方、芝山内ご寺院の皆様方、そして檀信徒の皆様方に加えて、今の私を支えてくださっている方々にお集まりをいただきまして、光道の供養の席を開かせていただきました。たくさんにお集まりを賜りまして、誠にありがとうございます。父は中華のスープと酢豚とかに玉をよく注文していました。今日は、オークラの桃花林にお願いして、コースの中にスープと酢豚とかに玉を入れていただきました。お口に合いましたでしょうか。私の母悦子の70歳最後の誕生日を、今改装中ですが本館の桃花林でいたしました。その時の写真を遺影として使っています。

父が終戦の時は17歳だったそう

ります。そして数年間はもう空腹で何も食べるものがなかった、と言っておりまして。しかしだからこそ、今日1日与えられたものを大切にということをよく言っておりました。私が美味しいとか不味いとか言いますと、よく怒られましてね、昔は食べられなかった、それをお前は贅沢だという風によく言われました。終戦の後、彼はよく空腹を抱えながら東大から上野の方に抜けまして、動物園に行き猿山で猿の様子をずっと見てたような話をしておりました。その時に人間に生まれて良かったと思っただけです。そして人間に生まれたからには何か自分に役割があるはずだと思っただけのことをよく話しておりました。

元々父は宗教学でございました。仏教、キリスト教、イスラム教、

そして山岳宗教の研究もしておりましたし、新宗教の方々とも色々

な縁がございました。東大で助手までいたしました。これから助教授、教授という道もあったのですけれども、祖父観道の病氣もございまして、学者の道を断念をして、僧侶の道に入りました。昭和34年伝宗伝戒を成満した。実は私が誕生した年です。父は30歳になって

から僧侶の道に入ったということでございます。その後、先ほど柴田台下がおっしゃっていただきましたように、椎尾弁匡大僧正、色々な宗教の方々に可愛がって

いただき、当時大正大学学長でいらっしやった中村康隆猥下の引きで大正大学伝道学の講師として迎えられました。父はとても遅れて僧侶

になり、気負っていた部分もあったかと思えます。私が言うのも失礼ですが、祖父観道はある意味では、宗教的な天才であったと思

います。祖父の背中を追い、父はなんとか追いつきたいという気持ちがあったことを感じます。その中で非常に多くの方に指導者として

念仏の信仰をお伝えして、それが本当に華開き、多くの方々に応援を賜り、その集大成としてこのよ

うな多くの方にご参列お見送りをいただく葬儀ができたこと、どんなにか喜んでいることかと思っ

ている次第でございます。ビデオをご覧いただきました長野県諏訪の唐澤山阿弥陀寺のことは、わたくしよりもご存知の方もいらっしやいますけれども、今から25年前全焼いたしました。山のお寺ですから、水が届かず、もう本当に跡形もなく全焼してしまっ

たわけでございますが、それがなんと4年6ヶ月の歳月で見事に復興した。それは土屋光道があ

の山に大正大学の伝道学で25年、のべ1000人を超えるお坊様方の卵をお連れした。そういうこともござ

いまして、阿弥陀寺を管理していらっしやいます正願寺の前住職宮澤説雄上人、長野の袖山上人と

計り、そして当時の宗務行政の方々、大本山善光寺の皆様方も

ご縁を結んで、全国の皆様にお呼びかけをいたしました。募金を集めました。ちょうど大本願本堂本誓

殿を新築するということがございました。道を作り、本誓殿の古い建物を解体した部材を、唐澤山の上に上げて、今の本堂を組み立て

たわけでございます。大本山の本堂再建の名目で勧募することができたのです。そして唐澤山に上がったたたくさんの浄土宗の方々が募財をしてくださった、それによ

ってわずか4年6ヶ月目で、あの山の中に旧に倍する大きな本堂と、そして二階建ての立派な庫裡

ができあがったわけでございます。そしてその昔ご縁がございました中村康隆猥下、藤井実應猥下、落

慶法要を司どっていただきました。一条智光善光寺大本願台下。お三方のお名号石が今も唐沢山阿弥陀

寺の前には建っているわけです。その復興の一端を土屋光道が担ったことは、皆さんもよくご存知のことかと思っておりますが、今日

ビデオ見ていただきましたが、唐澤山に分骨をさせていただいて、どんなにか父も喜んでると思いま

す。父のことをもう一度思い出し念仏をしていただければたいへんありがたいことと思っております。先程申し上げましたように、祖

父は非常にカリスマ性のある、あらゆる宗教的な天才であったかもしれません。父はそれに比べれば人々のことを何とか念仏の道に導こう、という秀才であり教育者であ

ったというふうにも思っております。わたくしにはその両方の才能はございませ

ん。しかし本日お出まし下さった、お支えをいただく方々のお力を何とか集めさせていただ

きたたく存じます。眞生同盟は「眞実に生きる」、往生という言葉

葉がどうも誤解をされているところから眞生と名づけたのが観道でござ

いますし、同盟というのは今で言えば念仏のネットワー

クということかと思っております。閉じられた組織ではなく、色々な

念仏を称える方々のネットワークをお支えすることを、わたくしどもの使命としてこれからも活動させていただきたい、と考えています。

土屋光道の残したバトンを引き継いでいけるかどうかは、わたくしどもの精進はもとより皆様方の熱いお支えあつてのことと信じている次第でございます。

今日は大嵐の予定でした。どうなるかなと思っていましたけれど、実は通夜、密葬の日も大嵐の予定でしたが、なんと晴れました。生前「俺は晴れ男だ」とずっと云っておりました。若い頃はですね、「俺が乗る飛行機は、俺が乗っているお陰で落ちない」と云っていた人間でございまして、ああやっぱり死んでも凄いなと思っております。しかし今日は絶対雨になると私も思っていました。表葬儀からここにお出まされたく間、お陰さまで雨が落ちませんで、先生方のお話をいただく間に、ゴロゴ

ロと凄いな雷が鳴りまして大雨だったようですが、今雷も少し遠のいたようでございます。先ほど厳しい光道上人だったとお話を窺いましたが、雷を聞きながら極楽から私のことをまた怒鳴っているのかな、と思いました。

通夜、葬儀の時にも申し上げましたが、父光道は、「死ぬまで元氣、死んでも元氣」と云っておりました。土屋光道の命は、人間の命は終わつたけれども、まだまだこれからずっと往くと、「永遠の生命と無限の向上」だと日頃話しております。私共もまた同じ道を往く同志であると信じて、この世にある間は念仏の行に精進し、お釈迦様、善導大師、法然上人、念仏の祖師方、たくさんの方々に少しでも恩を返していく身にならせていただきましたと思っています。バトンは渡されましたけども、なかなか走り出せないような私でございますが、どうぞ今後ともよろしくお願い申し上げます。 十念

眞生の意義 (二)

土屋 観道 上人(眞生同盟初代主幹)

(前号より) 永遠の生命と無限の向上とは人生要求の最も根本的なものであつて、この根本の要求は一切生物の本能的本心の大道である。故に此の理想要求の完成としては幾多の曲節まげくせうは免れない所であるけれども、何れの時代に於ても其人類生活の本質を観察し来る時、各自時代の発現として自己自身の生命と人格向上の根本的要求とは如何なる迫害はくがい妨ぼう圧あつの中からも、更らに大なる力を以つても進展し来つつあつた事は疑われない事実である。ここに所謂永遠の生命とは現在に即したる永劫不死の生命である、否、生死一如の世界である。永劫不滅の自覚である。古今を貫く眞我の発現である。宇宙一なる本心の世界である。天地と一なる大我の我である。肉我を超越し、小我を無視せぬ眞生の我である。無限の向上とは即ち価値の生活である。神人の世界である。人格の完成である。宇宙的な生活である。全一の生命の生活である。而も小我を無視せざる理想の実現である。換言せば全一の如来を中心とせる神人の生活である。各自の個性を時処位の上に全顕たるの活動である。佛陀を理想とする人類の生活である。

然しか乍しら斯かの如きの理想生活は一朝一夕にして充実完成せらる可きものではない。恰も小児が母の胎内に宿りて漸ぜん時に生長して此世に出生し、やがては一人の人として生立つが如く、此の神人生活の理想実現も其の初めは人類思想の根本要求として極微ごくびの間に、星雲の夫れの如くに微かに共鳴を感じるに過ぎざるもの、やがては各自に自己本分の自覚に催され漸時生長

の暁に至りては自ら佛陀の自覚にも立つのである。されば吾人は此の道理を信知して遙かに如来の大悲を仰ぎ、自ら神人生活の自覚体現の到来を期す可きである。其の意味に於て吾人の理想は如来を中心とせる神の生活であり、大悲を中心とする佛陀の生活である。世界は日夜に進展す、我等の生活も日々更新すべきである。革新なき人類、向上なき民族、反省なき国民、理想なき人生は吾人の欲する処ではない。

然るに世間往々にして吾人の宗教を知らず、徒に避難攻撃、曲解誹謗して而かも得々たるものあるよしを聞く、中には自己の無安心なるにも気付かずして、反つて人の異安心を説く、もとより知らざるの罪とはいえ寧ろ哀れむ可く同情すべき人として之をいたわるべく、更らに進んでは自己の行動を反省して、浅薄皮層の模倣や、安価な私利的功利主義や対他的党派的凡俗的な不徳義や、無信仰な排

他的独よがりの宗教や、瞞着的なる迷信は吾人の採らざる処である。此の意味に於て世間の批評も他山の石として全く無用でないかも知れぬ。加之吾人の宗教は如来を中心として如来の如く、神を中心として神の如くに日夜に靈化して行くことを常恒に心かく可きことである。

然乍ら、吾人は如何にして此の理想実現の楷梯を踏べきか、是偏に吾人が如来を中心とし、神を中心とする宗教生活を要求する所以である。殊に現代思潮の奔流はともすれば反つて眞人の要求を裏切つて人類生活の理想を妨げ、永く人類の至幸を来さざらしむる傾向もある今日、吾人は更らに一層に我等神人の大道を理想として進むべきものである。

然るに時代変調の今昔を考うれば人生僅かに五十年、逝くものは已に水の如く、日夜に流れて止むことがない。而も此間、日夜に為すところ何者ぞ、一度過ぎて又と

帰らぬ今日の一日噫吾何を為すべきぞや人類の一生を回顧して人類の理想を想う時、吾人は更らに一層の反省と理想実現の向上とは献身の努力を為すべきではないか、徒に明かし暮らさんは吾人の欲す

仏に生れる

土屋 光道 上人(眞生同盟二代主幹)

る所にあらず、願わくば宇宙の理想を理想とし、神の心を心とし、神人の大道に立つべきである。願わくば如来の大悲を中心として眞生の世界に生く可きである。
(一九二二年二月)

(一)

四月八日は、お釈迦様の誕生日、灌仏会、花祭りとして、すべての仏教徒が、聖者の生誕を心から祝福する日であります。その紀元は非常に古く、我国においても、仏教初伝まもなく行われ、今日にいたつております。クリスマスにくらべて、今日や、その影が薄くなつたことは大変、残念なことです。この聖なる日にちなんだ私どもの誕生の意義をあらためて考えなおしてみましよう。

洋の東西を問わず、一般に各自

の誕生日を毎年祝うようですが、ひるがえつて考えてみると、何故わざわざ毎年死ぬまで誕生日を祝うのでしょうか。親にとっては、出産の安堵感、子の成長をたしかめる喜びから記念すべき日でしょうが、祝われる本人にとつて、何故、自分が祝われ寿がられるのか、十分反省してみる必要があると思います。多くの人は、社会習慣で大勢の人から祝われ、御馳走が食べられる結構な日ぐらいに思っている程度でしょう。

一体、人間として呱呱の声をあ

げた日を祝えるのは、その前提として、人間としての生を受けることが困難であり更に、この人間として生れることが限りなく尊く、この実人生がよいものであるという信念が先にあるからです。

犬猫は動物に生れたことを祝うことはありますまい。又、たとえ人間に生を受けてもわが人生が暗い苦しいものであり、わが人生を不幸と感じ、喜べぬ人は祝うどころか、むしろ、己れの誕生を呪わねばならぬでしょう。「生れてこなければよかった」「頼みもせぬのに、親が勝手に生んで、こんな苦勞をせねばならぬ、親に損害を賠償してもらわねば」という青年が多いとききます。「こうして人間として

生れ来て本当によかった。お蔭さんでした。この人生の尊きをこの人間生活のよさを知り、生れてよかった」と深い感謝の実感をもって、自己の誕生を祝し、更に他人の誕生を心から祝福し生甲斐を知る人は今日少ないのではないでしょ

うか。

私どもは、誕生日をして、心から自分の誕生日を祝し、今日にいたりえた親・師・家族・社会・天地、如来の恩を感謝し、今後一層の自己の社会への責任の重大性を自覚し、自らを激励する日にしなければなりません。その為には自己の生活の中にこの人間の尊き、人生のよさ、生甲斐が実感されなければなりません。

そして更に、毎日々々が、自己の誕生であり、新生の第一日であるという自覚をもって喜びと緊張にみちた毎日の生活に自分の生活を大転換してゆかねばいけないとします。

(二)

「今日は赤ちゃん！」のメモデイが流行っています。本当に、赤ちゃんほど可愛いものはない、どうしてこんなに可愛らしいのでしょうか。一方から考えると、大人にくらべて、赤ん坊程、傍若無人な生きものはない、一番ぜいたくで、

自己中心的暴君で、他人の迷惑など一向とんぢやくしない。そのくせ、抵抗力も弱く、しゃべることも、一人歩きも出来ず最大級の保護を必要とする。大人と比較すれば、すべての点で未熟であります。大人と同じく、手や鼻や口など一切の機関がもうちゃんと備わっており、大人になる素質能力をすっかり秘めているのであります。そして大人と同等の人權、生命の尊厳を持っています。誕生前の墮胎の罪と、誕生後の幼児殺しの罪とをくらべれば、後者は立派な殺人罪として大

人と同じく生命を尊重されています。大自然の傑作、奇蹟というか神秘というか、自分の生んだ子でありながら、その造化の妙に感嘆せずにはおれません。

さて、そうした赤ちゃんが、次第に育つて、やがて成人の日を迎え、一人前の大人になって社会に働くようになります。更に神秘は、肉体の発達と共に精神の世界が開けて来て、やがて靈性がめざめ、動物的

な人間生活、社会習慣的人生にあきたらず、ただ生きることではなく、よりよく生きたい、人生の真意義をめざして、わが魂の満足を求める機が熟すようになります。

人によって、その年齢やチャンスは異なりましようが、従前の凡俗なる有限の生活から、聖なる真実世界への転換が心にきざすようになります。ここに宗教的世界が展開し、そうした世界へ自己を投入せんと決心した時、信仰生活の第一歩がはじまります。こうした回心の時こそ私どもの第二の人生の誕生がなされるのであります。信仰とは、人格の方向転換であり、文字通り再生、復活、よみがえり、新生、真生なのであります。人生の全く新しい第一日が始まったと云えるのです。この心を、発心、道心、菩提心、願心と仏教で云い、或は、仏子の自覚、靈性、仏性の発現とも云うのであります。未だ仏に成ったのではないが、仏に生れたのであります。丁度、赤ちゃんが、一人

前の成人に比べれば、未だあらゆる点で未熟であるように、完成した人格、即ち仏陀に比べれば、まことに未熟な、いたらぬ赤子、凡夫でありましょう。しかし、一度び、仏に生れた生命を、正しく育てるならば必ずや立派に仏に成る諸要素、諸能力は無限に蔵され備わつて、寸豪の不足もないのであります。人と生れやがて人と成る（成人）如く、仏に生れやがて仏と成る（成仏）のであります。私どもは、

仏子の自覚、即ち、仏に生れる第二の誕生がなくてはなりません。そして、この赤子が、立派に育つよう最善をつくさねばなりません。

釈尊は、生れ落ちると、七歩あゆんで天地を指さし「天上天下唯我独尊。」と声高らかに唱えたと伝えられます。

七歩とは、人間の煩惱の闇の生きたる六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）の輪廻から一歩あゆみ出ることを意味します。又、この全世界に、唯だわれ独りのみ

が尊いというのは、決して釈尊一人のみが超人的存在で、他の人になみはずれた特別高貴な人間であると自称したのではなく、仏の法を依処とし、帰依し、灯明とする、私ども一人一人の自己自身が最も尊い存在であるという、人間としての最高の自覚を示しておられるので、そうしたわれとわが身に合掌の出来るほどの尊き自己であること、何物にも代え難い、比較の出来ない存在であることを宣言しておられると解すべきであります。

わたくしどもにとって、自分ほど愛しいものはありません、その一番愛しいものをして一番尊いものにする責任を自らに自覚し、従来、放逸凡俗な自己の生活を一

抛して、今日より、仏の子としての真実人生に生きようと決意したところに、入信の第一歩があり、人生の第二の誕生があるのであります。この記念すべき日を、弁栄上人は「志をおこしける日のあればこそ、またなき道に入りもこそせめ」

と寿がれます。

又、わが朝の古人も

「有為の奥山今日越えて、浅き夢みじ酔ひもせず」

と新生第一歩の決意をのべておるのであります。

皆さん、現在の私どもの生活から一歩ふみ出して、この天地に限りなく尊い自己を正しく守り育てる真生の第一歩を始めようではありませんか。

この決意の日こそ永遠に祝福さるべき第二の誕生日であります。

(一九六四年四月)

自己を知る

中野 善英 上人

銅は磨いても金にはならぬ

金にならぬからこそいいのです

特に銅として用いられる

メダカは大きくなつても鮒にはならぬフナにならぬからいいのです

いつまでもやさしい魚として可愛がられる何でも人の真似をせなければ幸福にならぬと思うが

………そうではナイ

むしろ自分は自分として自分の特色を発揮し自分の道を実現すれば人も感心し自分も幸福になれるのです

自分が自分を忘れて 鵜の真似をするカラスになつたらいのちを落として笑いものになるのです

自分の道は天の道天はわれに「この道」を押し給う

「汝その道を」を往けるように護り給う自己が「自己」を知ることが自己を救い天地にむくゆるゆえんです。

達磨さん

中野 善英 上人

オモチヤの達磨さんは 手も足も出さぬのに

なんべん倒されてもスグ起き上がる
あれは肚に力があるからです
尻がシツカリ坐っているから
です飽くまで貫くという決心が
あつたらなんべんたたき倒され
てもかえって強く起き上がる
自分の心の中で先きに負かされ
ているから相手から敗かされる
のです自信を失つたものは自分
の弱さのために自分から亡びる
必ずやれる！必ず幸福になる！
という自信を持つてすれば
必ず幸福になる 幸福にして行く
己れに勝つて進む者必ず勝つ

法然上人二十五霊場

巡拝参加者

二〇一七年十一月五〜七日

東京 土屋 正道

谷口 英夫

谷口 静代

諸澤 正俊

野田 弘子

上田 密記子

- | | | | | |
|-------|-------|--------|-------|--------|
| 神奈川 | 千葉 | 愛知 | 長野 | 佐藤 利恵子 |
| 小島 清一 | 邱 玉燕 | 江草 喜美子 | 服部 道子 | 水谷 雅豊 |
| 福田 哲也 | 福田 由貴 | 福田 哲也 | 福田 由貴 | 福田 哲也 |



菩提寺

法然上人生誕の地を

たずねて

福田 哲也

吉水講観智院支部が動きだして

三年、昨年はついに増上寺での御
忌詠唱奉納に支部単独で参加する
ことができました。

お念仏の元祖法然上人遺跡を巡
る旅、前回とは少し顔ぶれが変わ
りましたが、それでも十四名の参
加をいただき、十一月五日から始
まりました。今回は、上人が四国へ
配流される途中に立ち寄られた地
と生誕および初学の地を巡る行程
です。上人の幼少期と晩年に思い
を馳せる旅となりました。

上人は現在の岡山県久米郡で、
武士の家にお生まれになりました。



勝尾寺 二階堂

幼名を勢至丸と申します。八才

の時、夜襲によりお父様を失いま

す。そしてお父様の遺言に従い出
家を決意、仏道に入られます。向
かつた先はお母様の弟である勸覚
上人がいらしたお寺、岡山、鳥取の
県境、山深い所にある菩提寺です。
幼き勢至丸の頭脳明晰ぶりは周
囲を驚かせ、十五才で比叡山に登
ります。お母様ともその時が今生
の別れとなりました。

上人がお生まれになったお屋敷
跡に弟子の熊谷直実公が建立した
のが誕生寺です。上人がお生まれ
になった時、白い幡が二流れ飛ん
できて輝いたという椋の木はじめ、
上人ゆかりの物が多く残されてい
ます。

両旗の 天下ります 椋の木は
世々に朽ちせぬ 法の師のあと

私たちがお参りした日は岡山教
区檀信徒研修会が開かれ、土屋正
道上人が講演、我々も拝聴させて
いただきました。

菩提寺は聞いていたとおり山道

を登り詰めた所にあり、お大黒様の話では雪が降れば陸の孤島になるといことでした。この山深き所まで九才の男の子が歩いてきたことを思うと、ただただ驚くばかりでした。

それから数十年、上人が説かれた

阿弥陀さまの誓い(本願)を信じて ただただお念仏を称えなさい

という教えは大弾圧を受け、上人は四国へ配流となります。しかし、その配流先へ向かう途中に立ち寄られたそれぞれの地で多くのの人々にお念仏の教えを説かれました。

現在、東京から姫路までは新幹線で約三時間、菩提寺までの山道もバスに乗れば難なく到着。法然上人の時代と比べること自体意味が無いかもしれませんが、霊場巡拝を通して八百年前のことを考えてみるのもよいのではないでしょうか。

今回も色々な出会いがありました

た。十輪寺でいただいたご住職自作の木版画が印刷されたカレンダー、浄運寺で見た西の彼方に沈む夕陽、参加者の野田様ご紹介のお店では一同懇親を深めることができました。如来院の建つ寺町の静けさには少し驚きを感じ(今までは尼崎と聞いて思い浮かべていたのはダウンタウンの出身地(笑)。今後は改めます)、勝尾寺二階堂は山門からの山道はしんどかったですが、そこからの眺望は見事でした。

おわりに
ご住職はじめ、参加者のみなさま、ピーエス観光様のご協力で今回も無事に終えることができました。ありがとうございます。

すでに第三回の計画に取りかかっています。出来上がり次第ご案内いたしますので、ご参加をお待ちしております。

今回お参りした寺院の御詠歌

十輪寺(第三番霊場)

生まれては まづおもひ出ん古里に ちぎりし友の 深き誠を

浄運寺

かりそめの 色のゆかりの恋に だに あふには身をもを しみや はする

如来院(第四番霊場)

身と口と 心のほかの 弥陀なれば われをはなれて 唱えこそすれ

勝尾寺二階堂(第五番霊場)

柴の戸に あけくれかゝる 白雲を いつ紫の 色に見なさん ※誕生寺は文中に記載

弁栄上人百回忌

浄財報告

【ひかり2017年11月号より転記】

「ひかり」九月号、また「眞生」に「山崎弁栄上人讃仰会 勸募のお願い」を同封したところ、早速多くの方より、ご浄財を頂戴いたしました。心より御礼申し上げます。以下順不同ながら、平成

二十九年十月十四日までに、確認できた方のご芳名を記させていただきます。

◆金二百万円

金田隆榮

◆金百万円

野崎義永様 井出次郎様

金田恭俊様

◆金五十万円

里見達人様 匿名一名(岐阜)

◆金二十万円

淑徳高等学校同窓会「淑水会」様

◆金十万円

八木季生台下 高橋弘次台下

相馬宣正様 村松年秋様

末次信明様 高德院様(神奈川)

浄泰寺様(佐賀) 一行院様(東京)

土屋正道様 大法寺様(佐賀)

円光寺様(岩手)

◆金五万円

小宮山ツクル様 加藤暢英様

阿部泰明様 石井恒雄様

鷹鸞信道様 堺和彦様

西應寺様(東京) 西念寺様(香川)

金田昭教様 赤荻孝明様

矢野司空様 珠林寺様(福岡)

誕生寺様(岡山) 福田行慈様
◆金三万円

赤間健一様 法眞寺様(栃木)
大島隆獅様 高野公伸様
地福寺様(三重) 青木一彦様
大西勇様 舟橋富恵様
福田良子様 芥川真理子様
常念寺様(山形) 鴻野千賀子様
池田悌一郎様 石藏光俊様
實相寺様(静岡) 土井唯照様
吉川瑞浩様 岩下玲子様
岡村安雄様 西堀美枝子様
井上勝朗様 原久子様
長濱智代様 有本亮啓様
普門寺様(山口) 久保田修司様
三輪晃照様 坂野明彦様
石井珠子様 北條秀雄様
金子明生様 戸田政江様
法臺寺様(埼玉) 小熊とり子様
明石和成様 泉有彦様
金野潤法様 山岡良子様
野上泰夫様 植木勉様
測之坊様(長野) 熊倉邦彦様
藤井法空様 上野山則子様
小川晴江様 吉田雅寛様
鈴木勝彦様 渡辺ハツエ様
広兼行男様 宇高良哲様

齋藤啓太郎様 川原田ひろみ様
住江紀美子様 西方寺様(福岡)
聖福寺様(埼玉) 佐藤富士夫様
佐藤冬樹様 長専寺様(北海道)
谷本信雄様 八木アヤ子様
永心寺様(群馬) 川端幹雄様
長念寺様(群馬) 安蓮社様(東京)
釈心智様 磯岡哲也様
山中早苗様 高橋克子様
吉田眞知子様 妙泉寺様(京都)
伊藤ゆみ子様 織戸恵子様
小島美江子様 森島米史郎様
山際久美様 三浦幸子様
河村政夫様 柳田由喜子様
浜田誠実様 法然寺様(大分)
熊耳雅美様

崎弁栄上人讃仰会 勸募のお願い」を
同封したところ、多くの方より、ご浄財
を頂戴いたしました。心より御礼申し
上げます。
昨年、11月号の第一回浄財報告につ
づき、第二回目の浄財報告となります。
以下順不同ながら、平成二十九年十月
十五日(平成三〇年一月八日)までに、
確認できた方のご芳名を記させて頂き
ます。

服部法照様 常楽寺様
極楽寺様(広島) 安倍ミツ子様
廣瀬童心様 神居文彰様
水谷浩志様 福西賢雄様
三枝樹隆善様 小橋通宇様
福田行海様 本原信道様
石田祐寛様 大橋俊史様
松平寛隆様 鈴木智祐様
浄土院様(岡山) 慶藏院様(三重)
亀尾融照様 慶元寺様(東京)
法性寺様(東京) 清岸寺様(東京)
本泉寺様(茨城) 宝台院様(静岡)
春光院様(神奈川) 中野富夫様
佐々木有一様
◆金二万円

◆金一万円
佐久間聰子様 渡辺好教様
西方寺様(大阪) 青柳空泉様

※至心に感謝申し上げます。次の報告
は来年二月号を予定しております。
慈業完遂の為、何卒、ご支援よろしく
お願い致します。
山崎弁栄上人讃仰会代表
金田 隆栄

◆金五万円
法學寺様(長野)
長安寺様(福岡) 九品院様(佐賀)
極楽寺様(新潟県柏崎)
浄念寺様(愛媛) 法城寺様(愛知)
善導寺様(群馬県館林)
大巖寺様(千葉) 長谷川匡俊様
◆金十万円
◆金五十万円
※事前に光明会へご寄附
鈴木美津子様
◆金百万円
※『人生の帰趣』購入に充当
◆金三百万円
一般財団法人光明会様

【ひかり2018年2月号より転記】
「ひかり」九月号、また「眞生」に「山

善教寺様(神奈川県)

寶松院様(東京) 近龍寺様(栃木)

江草喜美子様

専称寺様(京都) 炭屋昌彦様

宮木美知子様 蓮光寺様(埼玉)

法蔵寺様(滋賀) 佐藤宗順様

植西武子様

◆金三万円

田中善男様 如来光明寺様(大阪)

長徳寺様(長崎) 佐野謙三様

西野翠様 服部道子様

江角弘道様 三宝寺様(山形)

谷口英夫様 大谷隼夫様

蓮馨寺様(埼玉) 局洋次郎様

梅辻素道様 正幸寺様(群馬)

大雲寺様(東京) 愛知忠明様

花岡こう様 小見幸治様

谷性寺様(愛知) 善光寺様(大分県)

白蓮坊様(長野) 菅沼祥子様

高橋照美様 杉野光明様

高木宏昌様 山口豊彦様

◆金二万円

善光寺様(東京) 大念寺様(富山)

溝ノ上千枝子様 黒田俊広様

黒田盛之様 心光寺様(福岡)

専修寺様(東京) 大橋英和様

佐藤蓮洋様 吉水隆子様

齊藤ノブエ様 徳雲寺様(愛知)

東島稔様 山口千枝子様

◆金一万円

真木栄様 金谷博様

白川令子様 巻田和男様

蔵福寺様(茨城) 川添崇様

直指庵様(京都) 山岡和知様

高橋高幸様 最勝院様(千葉)

無量寿寺様(北海道)

迎接寺様(大分)

早川省二様 正覚寺様(岡山)

萩原雄吉様 多賀谷浄繁様

今井俊宏様 佐々木清美様

北野昌子様 遠藤幸子様

花岳院様(東京) 高橋淳子様

岸田年生様 岡村涌亮様

浄円寺様(佐賀) 西方寺様(福岡)

横井俊道様 角岡隆壽様

安倍逸郎様 天野雅秀様

蘇田三穂様 蘇美鳳様

神谷鈴子様 金田大祐様

松壽院様(静岡) 願行寺様(長野)

常念寺様(山形) 山本昇子様

念西寺様(石川) 大蓮寺様(千葉)

林春美様 小田栄範様

谷口正一様 山野裕之様

田代泰彦様

※現在の所、一七九〇万円の御浄財が

集まりました。至心に感謝申し上げます。

げます。また、本年「ひかり」六月号に、

第三回のご報告を申し上げます。

山崎弁栄上人讃仰会代表

金田 隆栄

柏崎念仏修養会ご案内

五月二十五日(金)十二時半

～二十七日(日)一五時半

集合 柏崎駅 十二時半

道場 椎谷観音堂

市内浄光寺別院

会費 志納

宿泊 シーユース雷音

懇親会 五千円 (宿泊費別途)

市内浄光寺別院の書院に移ります。

申込 五月二十日締め切り

六時礼讃別時念仏会

ご案内

六月八日(金)一八時半

～九日(土)一八時

道場 観智院本堂

※夕食を済ませてお越し

下さい

導師 法学寺 古田幸隆上人

会費 五千円

服装 自由

持物 法要集(礼誦法)

※お持ちでない方はご利用

意いたします。

一日を六時に分け、四時間ごと

に仏を讃える善導大師の『六時礼

讃』を称え、仏様の周りを行道散華

して廻ります。

申込 六月五日締め切り

椎谷観音堂で念仏法話、夕刻に

東京の中心で仏の名を呼ぶ 第13回増上寺24時間不断念仏会



- ・24時間、ノンストップの念仏会です。ただひたすら「なむあみだぶつ」と称え続けます。途中で五体投地や行道(仏さまの周りを巡る)による念仏も加えます。
- ・途中からの参加、中途での退場、中抜け、30分参加だってOKです。お勤め帰りや観光のついででも歓迎します。真夜中でも構いません。会場内には必ず誰かがいて、あなたと祈りをともにします。
- ・疲れたら控室で休みましょう(湯茶はどなたも随時摂れます)。
- ・長時間(概ね6時間以上)参加者で希望の方は修養証(参加証)を発行します。
- ・数珠や輪袈裟をお持ちでしたらぜひお持ち下さい(宗旨不問)。僧侶の方ではできれば黒衣・如法衣にて。

日時：2018年5月12日(土)13:00～13日(日)13:00

会場：浄土宗大本山増上寺(港区芝公園4-7-35)

会費：5,000円(夕・朝食料金込)

但しショート参加(概ね2時間まで)ワンコイン

※ショート参加は食事の提供はありません

燈籠：ご志納 2,000円より(ミニ燈籠 500円は当日申込み)

※ ご来場でない方の献燈料は、

現金書留か郵便振替(00130-4-705649 観智院)で事務局にご送金下さい。

日程(変更することあり)

5月12日(土)

5月13日(日)

12:15 受付開始

1:00 礼拝or行道

12:30 オリエンテーション

5:00 礼拝or行道

12:45 開自(開始にあたり祈願)

5:30 大殿朝勤行(希望者のみ)

13:00 不断念仏開始

7:00～8:00 朝食(事前申込者)

以降 24 時間ノンストップ

9:00 礼拝or行道

17:00 礼拝or行道

10:00～11:00 増上寺紹介・境内拝観(希望者のみ)

18:00～19:00 夕食(手打ちそば)

13:00 結願(終了にあたり感謝と回向)

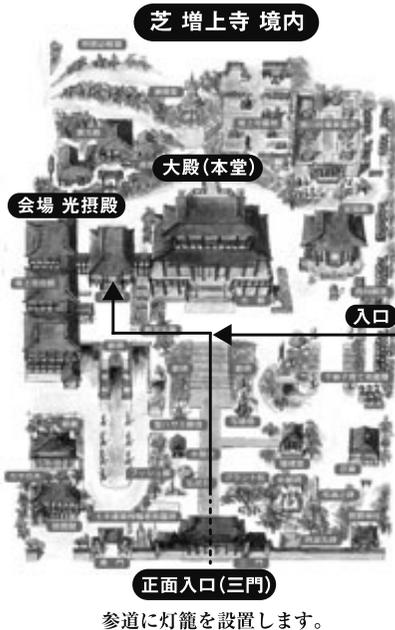
21:00 礼拝or行道

14:00 解散

申込先：24時間不断念仏会 事務局

〒105-0011 東京都港区芝公園2-2-13 観智院内

FAX:03-3431-7807 本行事特設E-Mail:nenbutsu24@hotmail.co.jp



詳しくは、ホームページへ
<http://canchiin.net>

【参加申込書】 私は 5月12日～13日に開催の不断念仏会に下記の内容で参加を申し込みます。 ____月 ____日

| | | |
|--------------------|---|-----------------------------|
| お名前(ふりがな) | | |
| 連絡先 | 電話: | E-mail: |
| おところ | 〒 | |
| 朝食 (○をおつけ下さい) | 要・不要 | 朝食申し込みに限り11日〆切 |
| 参加予定 (○をおつけ下さい) | 5月 ____日 ____時 ____分から ____日 ____時 ____分まで(当日予定変更可) 13日午前 増上寺境内拝観 希望する・希望しない | |
| 修養証 | 要・不要 | (6時間以上参加の方は以上どちらかに○をおつけ下さい) |
| 燈籠 願意 (希望者のみ記入) | (世界平和、震災復興祈願、自家先祖供養など随意) | |

※ご記入の上、上記申込先まで Fax か郵便にてお送り下さい。E-mail の場合は、件名を 24 時間申込として、上記事項を本文に記載下さい。